「律法からの解放」（ローマ７：１－６）　2018.7.29

私が牧師になって間もない頃、教会のひとりの信徒の方から、礼拝後、「先生の説教を聴いていると、なんだか息が詰まるような感じがする」と言われたことがあります。今となっては、私にとってはそれは金言でありました。すなわち、私の説教は、その方には喜びの知らせとしては届いていなかったということです。思い返しますと、その頃の私の説教は、「聖書によれば、これが神のみ心です。ですから私たちはこのように生きましょう。このように生きなければなりません」というような説教になっていたように思います。喜びの知らせとしての福音を語る、というよりも、いわゆる「お説教」になってしまっていた。そのため、聞く側にとっては、「クリスチャンはこうあらねばならない」という、何かいつもお尻を叩かれるような、発破を掛けられるような、そういう説教になっておりました。

そのようなとき、私が読んでとても感銘を受けた本の一つに、ポール・トゥルニエというスイスの精神科の医師であり、キリスト者である著者が書いた『人生の四季』という本でありました。その中に、「キリスト教は人間を抑圧するものか、解放するものか」というタイトルの章がありました。そこには、「人はどう生きるべきか」ということを中心に説く道徳主義的な説教、キリスト教信仰は、人々を解放するどころか、かえって人々を抑圧している、という現実を指摘していました。精神科医ですから、真面目なクリスチャンが受診してくる、どうもキリスト教信仰はオカシイのではないか、という提言であります。そのようなメッセージは、常に聴く者たちに対して「こうあるべき」と語りかけ、そう生きられない人に対しては、「あなたは失格者だ」というメッセージとなってしまう。

福音書に記されていますように、主イエスと対決した律法学者やパリサイ人たちの教えは、人々を解放するどころか、人々に律法の重荷を負わせ、まさに抑圧しておりました。人々は求められている律法の教えを果たすことができず、苦しめられていました。そのような律法による束縛というものは、何もユダヤ教の世界だけでなく、キリスト教信仰においても、形を変えた律法主義が生まれ、信仰者をかえって苦しめることが起こってしまう。実際、私たち、自らを顧みても、「クリスチャンはこうあるべき」という教えや考えが心の底に根強く残っていて、そのような考えが私たちを苦しめる、ということがあるのではないでしょうか？キリスト教信仰が、かえって息が詰まるような、私たちを窒息させそうになることがある。

その原因は、福音が福音として語られていない、また福音を受け止められていないからでありましょう。福音とは本来、この私たちが何をなすべきかが中心として語られるのではなく、反対に、神さまが私たちのために何をしてくださったのか、これが福音の中心です。もちろん、人間の応答も語られていますが、中心は神さまが私たちのために何をしてくださったか、神はどういうお方か、神さまがわかることが恵みであり喜びであります。そのときに、人はさまざまな囚われから解き放たれていく。神さまがわからないから私たちは苦しんでいる。今朝、私たちは、私たちを縛りつける律法から解放されたのだ、という喜びの知らせに改めて聴きたいと思います。

７章に入ってまいりました。この章の初め、パウロは、「**兄弟たちよ**」と親しみを込めて呼びかけながら、「このことをぜひ知って欲しい」と熱く語りかけています。「**それとも、兄弟たちよ。あなたがたは知らないのか。わたしは律法を知っている人々に語るので**

あるが、律法は人をその生きている期間だけ支配するものである」（１）。「**支配**」という言葉がここに再び出て来ました。前の６章では、罪と死が、私たち人間を支配していたと語られていました。そしてこの章では、今度は律法による支配について語ります。すなわち、神の律法が、私たち人間の主人となり、私たちを支配してしまっている、という現実に焦点を当て、その律法の支配からの解放としての救いの恵みを語ります。

その律法の支配について、「**律法は人をその生きている期間だけ支配するものである**」とあります。律法の規定が人に及ぶのは、その人が生きているときだけという。死んだ人に向かって、「さあ、今日は安息日にだから、あなたも起きて神を礼拝しなさい」などと命じることはない。人が死んでしまったならば、もはや律法によって支配される生き方が規定される、そういうことはない。

そのことを、パウロは２節から３節にかけて、結婚のたとえを用いて説明いたします。「**すなわち、夫のある女は、夫が生きている間は、律法によって彼につながれている。しかし、夫が死ねば、夫の律法から解放される**」（２）。夫婦となった男女は、両者が生きている間は、夫婦に関する律法の規定が有効である。

その結婚に関する律法によって妻が支配されている様子を、ここでは「**律法によって彼につながれている**」と表現されています。新改訳や新共同訳は、「**結ばれている**」と訳していますが、口語訳は「**つながれている**」と訳します。夫婦の関係について、「**結ばれている**」というのと、「**つながれている**」というのと、ずいぶんとニュアンスが違いますよね。「**つながれている**」という言葉を聞くと、皆さんはどういう状況をイメージするでしょうか。庭にいる犬のポチが鎖につながれている、という感じがいたします。実際、このギリシャ語の同じ言葉はマタイ２１章、エルサレム入城の直前、「**ろばがつないであり**」という表現で出てきます。さらに、マタイ２７章では、十字架につけられるために捕らえられた主イエスに対して、祭司長たちが「**イエスを縛って**」（２）とある、その「**縛る**」と訳されている言葉です。「夫に結ばれている」というのと、「夫に縛られている」というのと、全然違ってまいります。女性の皆さん大丈夫でしょうか？－大丈夫、アンケートは取りませんから、

「**しかし、夫が死ねば、夫の律法から解放される**」（２）。ここで、読んでいて“良かった”と思うのは、「夫が死ねば、夫から解放される」とは書かれていない。あくまで、「**夫の律法から解放される**」。新共同訳聖書が分かりやすいのですが、「**夫が死ねば、自分を夫に結び付けていた律法から解放されるのです**」。夫が生きている間は、夫婦関係が続いているため、夫婦に関する律法によって、妻としての生き方が規定されている。すなわち、夫に関する律法の支配の下にそのときは生きている。

そのため、３節にあるように「**夫の生存中に他の男に行けば、その女は淫婦と呼ばれるが、もし夫が死ねば、その律法から解かれるので、他の男に行っても、淫婦とはならない**」。夫が生きているときに他の男性のところへ行けば、これは姦淫の罪となる。しかし、夫が死んだならば、夫婦に関する規定から解かれる。すなわち、夫が死んだならば、他の男性のところへ行っても、姦淫の罪とはならない、という。

まあ、話としては分かりますが、「パウロ先生、もうちょっといい例えはなかったの？」と言いたいところです。パウロが言いたいことは、１節にある「**律法は人をその生きている期間だけ支配するものである**」ということ。夫婦関係のことをここで語りたいのではなくて、律法と私たちとの関係のことを語りたい。

その結婚に関する例えの後で、続く４節で、「**わたしの兄弟たちよ。このように、あな**

たがたも、キリストのからだをとおして、律法に対して死んだのである」と言います。パウロは何よりもこのことを知って欲しいと願っている。「**あなたがたも**」と、これを喜びの知らせとして語っています。

「律法が死んだ」というのではなく、「**あなたがたは、律法に対して死んだのだ**」と言います。同じことを、６節でハッキリと言い換えて、「**しかし今は、わたしたちをつないでいたものに対して死んだので、わたしたちは律法から解放され**」、新共同訳聖書では、「**しかし今は、わたしたちは、自分を縛っていた律法に対して死んだ者となり、律法から解放されています**」と訳します。かつては律法に縛られ、束縛されていたけれども、その律法に対して死に、今ではその律法の支配から解放されたのだ、という。

そのような律法からの解放は、「**キリストのからだをとおして**」とあります。イエス・キリストが私たちのために十字架にかかってくださった。律法が要求する罪に対する報酬としての死を、キリストがその身に引き受けてくださった。ガラテヤ３章１３節に、「**キリストは、わたしたちのためにのろいとなって、わたしたちを律法ののろいからあがない出して下さった。聖書に、『木にかけられる者は、すべてのろわれる』と書いてある**」という言葉があります。キリストは私たちのために、律法の呪いを受けて、十字架にかけられて死んでくださった。

その「**キリストのからだをとおして**」とは、キリストと一つに結ばれる洗礼によって、ということです。６章で語られてきましたように、私たちはバプテスマによってキリストと一つとされた。それによって、私たちもキリストと共に死んだ。「**キリストのからだをとおして**」という表現は、キリストと一つとなるバプテスマにより、キリストと共に私たちが死んだことによって、ということです。

それによって、「**律法に対して死んだのである**」。キリストと共に、私たちも律法に対して死んだのだ。死んだ以上、もはや律法によって縛られることはないのだ。この大切なことを受け取って欲しいと願い、パウロは「**わたしの兄弟たちよ。このように、あなたがたも、キリストのからだをとおして、律法に対して死んだのである**」と語りかけます。もはや、律法はあなたがたを支配することはないのだ。イエス・キリストと一つとなる洗礼を受けたあなたがたではないか。キリストが、あなたがたを律法の支配から解放してくださったではないか。もう、その支配の下に生きる必要はなくなったのだ！　喜びの知らせです。

なぜパウロが、このように熱く「**このことを知って欲しい**」と語るのかといいますと、律法の支配から解放されたはずのキリスト者が、相変わらず、律法の支配の下に生きていることがよくあるからです。前にもお話ししましたように、犬が、自分をつなぎ止めていた鎖が杭から外れて、もうどこにでも自由に行ける身になっているのに、それがわからず、それまでと変わらずに、鎖に縛られているかのように同じ範囲の中でぐるぐる回っていることがある。それと同じように、クリスチャンになった後も、それまで自分を支配していた律法からも解き放たれたはずなのに、なお、様々な掟のようなものに縛られて生き続けていることがある。実際に私たちの信仰生活が、実に様々な掟のようなものに縛られていることが、今なおあるのではないでしょうか？

教会生活を長く続けておられる方々の中には、「クリスチャンはこうあるべき」という教えが昔からたたき込まれている方がおられるでありましょう。もちろん、それはクリスチャン生活における訓練として、教育として教えられたものであり、私たちの歩みを支えてきてくれた、という良い方向で働いてきたという事実があるでありましょう。だからこそ、皆さんが今に至ってもまだ、信仰生活を続けておられる。ただ、本来は、そのように

その人を生かすためのそのような教えが、しばしば変質してしまうことがある。その人を生かすどころか、その人を縛り、支配の下におき、自由を奪い、その人を苦しめる、ということがある。トゥルニエが言うように、人を抑圧してしまうことがある。

たとえば、昔の教会学校でよく歌った賛美に、「三つの約束」という歌があります。

①お祈りはね　毎日するんだぜ　いつもイエスさま聞いててくれるから

②み言葉はね　暗唱するんだぜ　どんなときでもみ旨が分かるから

③教会にはね　毎週来るんだぜ　元気な信仰養うためだから

祈り、み言葉、礼拝、この三つを欠かさないようにしましょう、と歌う。これは子どもだけでなく、大人の方々に対しても、昔はよく週報の裏のページに、「信仰生活の何ヶ条」みたいなことが書かれていたりして、祈り、み言葉、礼拝のほか、「什一献金をしましょう」とか、「伝道しましょう」と書いてあった。これらの教えは、その人を生かすために、健全な信仰生活を送って欲しいという願いから語られている勧めのはずであります。聖書を読むことをとおして、私たちはいよいよ神の愛が分かり、祈りをとおして生ける神さまと対話をし、礼拝をとおして、自分は人間に過ぎないことを、神が神であることがわかる。いずれも、健全な信仰生活を続けていくために大切な教えばかりです。

ところが、私たちを生かすはずの教えが、ときに私たちを苦しめるものに変質してしまう。それらを守ることが出来なかったときに、「ああ、私は神さまとの約束を守られなかった」「私はクリスチャンとしては落第だ」と考え始めてしまう。さらには、何か悪いことが身の回りで起こると、ちゃんとお祈りをしていないからだとか、礼拝を休みがちだからこうなったのではないか、と思ってしまう。先週お話しましたように、私の大学時代にお世話になった岡田邦夫先生が、キャンプ場での奉仕中に落下して頭を打ち、その日のうちに召されてしまいました。お祈りも、み言葉も、礼拝も、献金も伝道も、熱心にしておられた先生がそうなりました。もし、神の教えを守れなかったら罰が降るとしたら、私たちはもうとっくに、召されているか、どこかにもう行ってしまっているのではないでしょうか。神の言葉は、本来、人を生かすための言葉です。ところが、神のそのような教えが、人を抑圧するものに変質してしまうことがある。振り返ってどういう教えが、どういう戒めが今なお私を苦しめている、あるいはビクビクしながら生きている、そういう事実がどこかにあるでしょうか。

パウロはここで、そのような私たちに喜びの知らせを語ります。６節を新共同訳聖書で見ますと、「**しかし今は、わたしたちは、自分を縛っていた律法に対して死んだ者となり、律法から解放されています**」。「あなたはこうしなければならない。そうでなければ救われない。そうでなければ滅びに至る」というような教えの支配から解放されたのだ。キリストが律法の要求する死を受けてくださったからです。私たちはもう律法に縛られる必要はない。キリストが縛られてくださったからです。ですからパウロは、そのような教えに縛られて、心理的な支配を受けて生きるのはやめなさいという。

私たちは、ときに自分のお尻を叩くようにして信仰生活を続けようとすることがある。日常生活においては、そのようなものも一定の効果があり、ときには必要なのかもしれません。しかし、こと信仰生活においては、私たちは福音によって、喜びの知らせによって生きる者たちであって、「ねばならない」とお尻を叩きながら生きるものではない。これは決して長続きはしません。どこかで息絶え絶えになってしまう。なぜなら守れる人なんていないからです。けれども私たちは、そのような律法の支配からもう解き放れているという。キリストがあなたを解き放ってくださったという。

それでは、私たちはどのようにして信仰生活を続けていくのか、６節後半に、「**その結果、古い文字によってではなく、新しい霊によって仕えているのである**」。「**古い文字によってではなく**」とは、「律法によってではなく」という意味です。律法のことを、なぜ「**古い文字**」と表現するのか。旧約の律法はもう古いから、それは捨てて、今度は新しい新約によって生きるのだ、という意味では決してない。「**古い**」というのは、人を生かす命を失っているからです。なぜ、神の言葉が命を失って古くなってしまうか、それは神さまが語られた言葉と、それを語られたお方、人格とを切り離してしまうときに、神の言葉が古い文字になってしまう。私たちを造り、私たちを愛しておられる神さまが、どのような思いを込めてこれらの言葉を語られたのか、そういうところから切り離して、律法の文字だけが一人歩きをしてしまう。旧約時代はまさにそうでした。そのとき、そのような文字としての律法は、人を生かすものでなく、殺すものとなってしまう。命を失った教えは、神さまから切り離された教えは、人を生かすどころか、人を縛りつけ、苦しめるものとなる。

私たちはそういう古い文字によって生きるのではない。今や、その律法の支配から解放されて、「**新しい霊によって仕えているのである**」。新改訳聖書では、「**新しい御霊によって仕えているのです**」とあります。「**新しい霊**」とは、生きておられる神の霊、キリストの霊、聖霊のことです。聖霊については、このあと８章で詳しくパウロは語り始めます。８章の始めのところでパウロが語っていることは、洗礼を受けた者たちは等しく、キリストの霊である聖霊が注がれた者たちである、と言います。新約聖書の信仰は、８章にいったらもう少し詳しく語りますが、私たちがキリストにつくバプテスマを受けるときに、等しくみな神の霊としてのキリストとしての霊を受けた者たちである、と教えます。どんな人も。それは、私が感じる、感じないではありません。神のわざとして、キリストの霊が注がれている。まだ８章ではありませんので、まだ詳しくは語りませんが、パウロは先取りするようにして、そのことを土台にして語る。私たちは神の霊によって生かされている者たちではないか。それが、「古**い文字によってではなく、新しい霊によって仕えているのである**」（６）という言葉です。皆さん、いかがでしょうか？私たちは神の霊によって、私たちのうちに住む聖霊によって生かされている者たちではないでしょうか。昔は、礼拝に行かねばならないと思っていた。無理矢理行かされた、あるいは、行かなきゃ悪い、ああ、今日も礼拝に行かなければと思っていた。でも今は、礼拝に行きたいと思う。こんな暑い日にと家族が止めても、それでも礼拝に行く。それは律法が命じているからではない。私たちのうちに神の招きの声が聞こえて、そして、礼拝に行こう、神の声を聴きに行こうという願い、思いが与えられている。それは、私たちのうちに住む御霊によって生かされているからではないでしょうか。私は、最後まで礼拝生活を続けたいと思います。ですから皆さんも、人に迷惑をかけちゃいけないなんて考える必要はない。歳を取って迷惑をかけてもいいのです。ここに私たちの命がかかっているからです。人様に迷惑をかけるから礼拝には行けない、なんてそんな悲しいことを言わないでください。教会は車イスでも来られるようにと、そう願います。最期まで、命のある限り礼拝をしたい。それは、礼拝においてこそ、神の言葉が生きた言葉として聴けるからです。

私たちは実際、神の言葉によって生きる者たちです。下手をすると、新約の時代においてさえ、その聖書の言葉が、神の霊が注がれたはずの言葉が、ここで言う「**古い文字**」になってしまうことがある。命を失った死せる言葉になってしまうことがある。旧約の時代だけではありません。今でさえ、聖書の言葉が「**古い文字**」になってしまう。それは、語

られているお方がどういうお方であるかを忘れてしまうときです。神さまと切り離して聖書を文字として読もうとするときに、私たちを苦しめる、縛り付ける律法に変わってしまう。

でも、聖書の言葉は、私たちの救いのために御子キリストをさえ与えてくださった神の言葉です。私たちを生かそうとして語られる言葉だとするならば、それは命の言葉です。そして、この命の言葉が私たちに力を持つのは、何よりも礼拝においてこそ、聖霊が働いてくださる礼拝においてこそ、神の言葉が愛の言葉として聴ける。礼拝においてこそ、ああ、神さま、あなたはそういうお方でしたか？と分かってくる。私は繰り返し、とにかく礼拝に来て下さいと勧めます。イヤイヤでもいい。なぜなら、礼拝の恵みは礼拝に出席しないと分からないからです。礼拝に行きたいと思ったら行く、と言っていたら行けるようになりません。なぜなら恵みが分からないからです。無理矢理でもいい、先生に言われるからでもいい。礼拝に来て欲しい。礼拝の中でこそ神さまが分かります。礼拝においてこそ、こんな私が赦されてあなたはもう解き放たれているという神の言葉が分かる。皆さん、私たちは神の言葉に聴き、ああ、この私も赦されている、この私ももう解き放たれている、その恵みに生かしていただきたいと思います。福音は人を縛り付けるものではありません。本当に一つ一つの囚われから解き放ってくださる。日曜日、疲れを覚えながらもなぜ礼拝に来るのか？ここで本当の休みが与えられるからです。あなたは神によって愛され赦されている。安心して行きなさいと送り出されていく。命が与えられて、私たちはこの週も、それぞれのところに遣わされてまいります。

お祈りをいたします。

天の父なる神さま、あなたの御名を讃えます。主イエス・キリストが縛られ十字架にかけられたがゆえに、私たちはもうさまざまな囚われから解き放たれていること、「あなたは解放された」と、喜びの知らせを「アーメン」と聴くことができますことを感謝をいたします。この週も聖霊の促しを受けて礼拝に集ってまいりました。あなたがお一人お一人を霊によって生かしてくださることをありがとうございます。今日もここからそれぞれの場所へ遣わされてまいります。どうぞお一人お一人を支えてくださって、家庭や職場、地域、学校にあって生かしてくださることをお願いいたします。

病気や弱さを覚えておられる方々を顧みてください。礼拝からしばらく遠ざかっておられる方々を、どうぞあなたの語りかけをお聞かせてくださって、礼拝に行こう、礼拝に行かねばならないという思いを起こしてくださることをお願いいたします。

今日も東北教区の五つの教会の上に、弘前、三沢、築館、仙台、福島。それぞれ立てられている教会を祝福ししてください。また、私たちの教会の献身者であります千葉和幸先生とご家族の上に、遣わされております岬教会の上に、主の豊かな祝福がありますようにお願いをいたします。

西日本での豪雨の災害、また、今台風が通過しています地域、これ以上被害が広がらないように守ってくださって、また、その片付けやさまざまなサポートが与えられますように憐れんでください。

このときを感謝し、主イエス・キリストのお名前によってお祈りいたします。アーメン。

（仙台南光沢教会牧師佐藤信人）